

『明治の精神異説
—神経病・神経衰弱・神がかり—』

度会好一

岩波書店／2003年／3400円＋税

ケアな一冊

脳病・神経病・神経衰弱そして…… 私たちはどこへいくのだろう

坂田三允（群馬県立精神医療センター看護部長）

本書は一言でいえば、帯封にあるように「病む精神に、明治の暗部を読む」本であり、「知識人の神経病・神経衰弱・脳病、民衆の神がかり・憑依妄想——明治精神の陰の系譜を掘り起こし、日本近代を捉えた負の構図を明るみに出す」本である。

まずは、おもしろい。トリビア(?)が満載されている。たとえば脳病文化と脳病の意味という項には、明治の日本では「脳がわるい」とか「脳病」という表現が手軽に使われていたことが述べられている。「長州閥の親分木戸孝允は明治六年の政府大分裂のさなかに、しつこい頭痛にたまりかねて『脳病』だと日記に書きこむわ、一八歳の透谷北村門太郎は恋する石坂美那に『脳病』だと打ち明けるわ、一葉樋口奈津は、離別しても思い切れない半井桃水に悩ましげに書き送るわ、これはもう脳病文化とでも呼びたいような文化現象である」。(へー!!)

あるいは、神経・神経質・神経病の起源の項には、現在私たちが用いている「腔」「鎖骨」「輪精管」「脂肪」「小腸」などの訳語は、宇田川榛斎という人が、かの有名な『解体新書』を相手取って作り出したものであることが書かれている。(へー)

そしてきわめつけは、神経衰弱が流行した理由の項で述べられる夏目漱石の話である。著者は、日露戦争後に神経衰弱が流行した理由の1つとして「欠勤や辞職に必要な診断書に格好の診断名として、重宝されたこと」をあげているのだが、漱石も診断書に利用しようとしたちゃっかり組で、仕事を辞めるのに必要だという診断書を「呉秀三君に頼んで神経衰弱にしてくれ」

と、友人に頼んだ手紙がある。

漱石が『神経衰弱の診断書』という誤字をくりかえしているのは、心理学的に面白い現象である」(へー!!!)

しかし、もちろん、本書はおもしろがっているだけで済む本ではない。明治は「文明開化」の時代であり、日本は西欧文明を摂取することに全力を注いだのだが、それは「欧米列強から『文明化』(＝植民地化)されるというアジア諸国が味わった屈辱をさけるために、自らを『文明化』(＝欧米化)する」という矛盾をはらんだ窮余の一策」だったのである。その結果としてもたらされたものは、エリート層の神経病であり、庶民の神がかりであり、両者に共通の神経衰弱であった。

さらに現代に続く「世界に誇れる風景を破壊し、(中略)大きな看板を背負ったビルを林立させ、コンクリートで固めた川の上を高速道路を走らせるという風景」であり、「新幹線に乗ったら、無残な風景をカーテンでさえぎり、弁当か週刊誌を広げるしかないという状況」であったのだ。『『便利』『安楽』だけが文明の尺度ではない』ことはいうまでもないことだ。

さて、これから私たちはどこへ行くのだろうか？ 価値判断の主体が自分の側にはなくて、外側にある弱い自我をもつといわれる私たちは、「グローバル・スタンダードという名のもとに滔々と押し寄せる欧米基準の大波をかぶりながら」、漱石が到達した「則天去私」という境地に、どこまで近づくことができるのだろうか？ ▲

さかた・みよし 2か月に一度この連載を書くのに、四苦八苦しています。ピーンとくる本に出会うまで、結構時間がかかって……。でも、一度手にした本は、最後まで読みます。